

『僕たちが描きたかったこと』

黒瀬 佳代

3600文字

夏休み、優紀はいじめっ子の坂口たちが浩斗を夜の公園のトイレに呼び出して驚かすという計画を聞いてしまう。

優紀も過去に坂口からいじめを受けていた。幼稚園の時に浩斗と壁に絵を描いたことを思い出し、坂口たちが来る前に汚いトイレの壁に絵を描こうと誘う。絵に驚愕した坂口たちも一緒に描き出す。

優紀は、いじめっ子の坂口たちが夜の公園に浩斗を呼び出して、トイレで驚かすという計画をたまたま聞いてしまった。幼馴染なのに、浩斗が学校でいじめられているのを見て見ぬふりをしている自分を日頃から歯がゆく思っていた。(公園に行ってはダメ!)と心の中で叫ぶ優紀。

優紀は中一の時にいじめを受けたことがあった。しかも坂口から。大人しい性格もあり、見た目も色が白く、髪が長いことから「幽霊」と呼ばれ、からかわれていた。傍から見ればたいしたことはないかもしれないが、優紀にとってはたまらないものだった。なにかあると「幽霊」と言われるため、教室では針のむしろの状態だった。中二になって、クラスが変わっていじめはなくなったが、坂口は廊下などですれ違ふとまだからかって来る。

浩斗は小柄で怖がりだから、たまたま坂口たちに目をつけられたのだと優紀は思っている。浩斗へのいじめはエスカレートし、最近ではお金も巻き上げられているらしい。

今はせっかくの夏休みでも、いじめは水面下で進んでいる。夏休みの間も気持ちが休まらないまま時は流れていく。出口がない、暗闇の迷路。誰も助けてくれない。でもそこからなんとか抜け出さなければいけないのだ。

優紀は浩斗の後をついて歩いて行く。浩斗が振り向くと、優紀は隠れた。浩斗が立ち止まり、優紀の方を見ている。

「あのさ!!」と優紀は声を振り絞った。

「なに？」

「今日、ぞう公園に絵具を持って5時に集合！」

「はあ？」

「約束したからね！」

「ちょっと……」

優紀は走って家まで帰った。押し入れにしまっている絵具セットを取り出し、用意する。母には夏休みの宿題に写生がある、暑いから夕方に友達とやることになったと説明した。我ながら、よくもこんな嘘がペラペラと出てくるなど、感心した。いつも母には嘘をすぐ見破られるのに、妙に納得していたのが後

からバレるかもしれないと想像すると恐かった。

公園に着くと誰もいない。ベンチの横にはゴミが散乱している。子供たちもこの公園で遊ばなくなった。ぞうのすべり台だけある寂れた小さな公園。少しおっかないと優紀は思った。公園のトイレに入るのは勇気がいる。壁には卑猥な言葉の落書きもされていた。(なんなのよ。来ないの？ せっかく浩斗のためにと想着て考えたのに……。いいよ。一人でやってやる)

寂れた公園を似つかわしくないきれいな夕日が照らしていた。

「よし！」と優紀は思い切って、男女共用トイレに入った。白の壁が灰色がかっている。

優紀が壁に白の絵具を塗ってみる。(なかなか絵具では難しいな。幼稚園の時はうまくいったのに～)

優紀が絵具では無理かとあきらめかけた時、自転車のブレーキ音が聞こえた。走る音が近づいて来る。

「あっ？」

浩斗がペンキを持って入って来た。

「ごめん。遅れて。姉貴にペンキ借りるのが大変でさ」

「ペンキ？ お姉さん持ってたんだ」

「姉貴、DIYにハマっててさ」

「十歳上のお姉さん」

「うん。この壁は絵具じゃ無理だろ」

「なんで私がやりたいことがわかったの？」

「幼稚園の時、白い壁に絵を描いたよな」

「そうそう！」

「落書きされて、それで園児たちで楽しい絵を描こうってなって」

「そうだったよね。お菓子に動物、車、ジェットコースター。みんなそれぞれに好きな絵を描いて」

「それからは誰も落書きなんてしなくなった」

「知ってた？ 今でもあの絵あるんだって」

「そうなんだ！ すげえ。今度見に行こうか」

「うん」

「よし！ 描こう！」

優紀と浩斗は、壁に虹を描き、太陽を描き、白い雲を描き、色とりどりの風船を描いた。

優紀は描いてる途中、器物損壊罪で逮捕されるんじゃないかと不安になり、おそらく浩斗も同じことを思っていたようだが、二人で笑い合っただけで描いてるうちに、そんなことは忘れてしまった。

どれくらい時間が経っただろう。何台かの自転車のブレーキ音が聞こえた。
(坂口たちだ！)

最初、浩斗を捜していたみたいだが、様子がおかしいとトイレに入って来た。

「おい！ なんだよ、これ……」

坂口と坂口の子分たちは口をあぐりさせている。

「おっ、おまえらが描いたのか??」

坂口の声が裏返っている。

ペンキが顔についた二人が思わず頷く。

「こっ、こんなことして、はっ、犯罪だぞ！」と子分たちが叫ぶ。

坂口がペンキを持つ。

(ちょっと、なにするつもり……)

「さっかん、やってやれ！」「むちゃくちゃにしてやれ！」

坂口は、壁の端に絵を描き始めた。

子分たちは唾然としている。

「なにやってんだ、おまえらも描けよ」

子分たちも、慌てて描き始めた。

「坂口くん……」

坂口はかわいい象を描いてみせた。子分たちは鳥とパンダを描いた。

「おまえら中々やるな。幼稚園の時、壁に絵を描いたよな」

「坂口くんも覚えてたんだ？」

「おまえらのおかげで思い出した。俺、絵好きなんだよ。こう見えて美術だけは成績いいんだぜ」

「絵、見たらわかるよ」

優紀は坂口と普通に話せていた。

「このトイレじゃ、おまえを脅かすことなんかできないな」

「えっ？ 確かに」

「こっちが驚かされちまった……。そうだ写真撮ろうぜ」

皆がそれぞれ、スマホで写真を撮る。

最後に皆でぞうのすべり台を滑って帰った。子供の時より、大きくなってから滑るすべり台のほうが怖かった。

数日後、ぞう公園のトイレの絵が話題になり、ワイドショーにも取り上げられた。誰かが Twitter に写真を投稿して話題になったのが発端だが、それは優紀たちの中からではなかった。

優紀たちには自分たちが描いたことを口外しないと暗黙の了解ができていた。

全国ニュースでも取り上げられ、大変なことになったと思っていたが、コメントーターの意見や視聴者からの意見は好意的なものばかりだった。

ぞう公園のトイレの絵を見ようと行列までできてしまった。子供たちも絵を見に来るようになって、ぞう公園で遊ぶようになった。

ゴミのポイ捨てもなくなった。そのうち、色が剥げたベンチや、ぞうのすべり台も塗り直され、ぞう公園は子供も大人も訪れる、他の公園の見本のようなった。

優紀と浩斗、坂口と自分たちには、妙な結束力ができたのだった。

(了)